

二〇二〇年度 入学 試験 問題

国語

注意

- 一、解答用紙には受験番号の記入欄が三か所ある。
 - 三か所とも正確、明瞭に記入すること。
- 二、解答用紙には氏名の記入欄が一か所ある。
 - 正確、明瞭に記入すること。
- 三、解答はすべて解答用紙の所定欄に記入すること。
 - 解答用紙の裏面は使用してはならない。
- 四、文字の不明瞭なもの、判読困難なものは、無効とする。
- 五、問題紙の本文は十四頁ある。試験開始後、落丁・損傷がないか確認すること。
- 六、試験終了後、問題紙は各自持ち帰ること。

— 次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

突然だが、子供の頃にタイムカプセルを埋めたことはあるだろうか。学校の授業や行事で、先生や友達と一緒に埋めたという人も多いのではないだろうか。ブリキか何かでできた容器の中に、大事にしている（とは言ってもそこまで大事すぎない）物や、未来の自分たちに宛てた（とは言ってもそこまで真剣な内容ではない）手紙などを入れ、何年も経ってから掘り返すことを楽しみにしながら（とは言っても埋めたことをつい忘れがちになる）校庭の隅に埋める。せわしなく転変し続ける地上の世界とはまるで無縁かのように時を超え、あの頃の自分たちにとっての未来に届くこととなるタイムカプセルの存在は、とてもロマンティックで心惹かれるものがある。

また、タンスや押入れ、物置の奥から思いもよらない物が出てきて、まるでタイムカプセルのような機能を果たすこともある。誰も着ることのなくなった小さな服や、撮ったことすら忘れていた懐かしい写真、最初は意気込んで丁寧に書いていたのに後半は白紙のまま放置されているノートなどが、軽い驚きと共に発見されたのをきっかけにして家族の間で思い出話に花が咲いた、なんてことも決して珍しいことではないだろう。これがささやかながらも嬉しいサプライズだったのであれば問題はないが、ある人にとっては見られては困る「動かぬ証拠」だった場合、関係者を巻き込んだの騒動に発展、なんてこともあるかも知れない。このような擬似タイムカプセルは確かに、本家タイムカプセルとは異なり意図的に仕掛けられたものではないが、かと言って絶対に見つからないように隠されたという訳ではない。いわくつきの品でさえも、捨てられていたのではないのだからいつかは出てくるのが予想できたはずである。その意味では、これらが再び誰かの目に触れる結果となったのは、どちらかと言えば本望だと言うこともできる。タイムカプセルというものは基本的に、将来の発見を前提としており、けなげにその時を待っているのだ。

しかし、発見されることなど望まれていなかったにもかかわらず、埋めた人々の意志には一切関わりなく、後世の人間によって勝手に掘り起こされてしまう、いわば不本意なタイムカプセルがこの世には存在する。遺跡^Bである。昔の人々の建造物や住居跡、そしてそこに残された様々な遺物は、そもそも地中に埋めておこうと誰かが思ったような類のものではない。埋めたのでは

なくただ埋まつただけである。発掘してくれと頼まれた訳でもないのに、我々は彼らの遺した物を一生懸命探し出しては貴重なタイムカプセルとして享受しているのだ。いや、説明はむしろ逆であり、タイムカプセルとは実は、我々の人生のスパンに収まるよう程よくコントロールされた、「――」遺跡ごつこのことだったのだ。

遺跡は、我々の祖先がどのような生活を営み、どのような社会を形成し、どのような文化を生み出したのか、そしてそれが現代の我々にどのような影響を与えているのかを知るための大きな手がかりであり、考古学的な発掘調査がなければ知り得ないことはあまりに多すぎる。文字史料がない時代や地域の事柄に関しては遺跡発掘以外に当時を知る方法はないし、たとえ記録が存在する場合でも、史料は何者かによつて書かれたものである以上多かれ少なかれ恣意的であり、遺跡や遺物による裏付けを待たなければそのまま鵜呑みにはできない内容を含んでいる。文書とは異なり、遺すつもりで遺されたのではないからこそ、遺跡は人々のありのままの姿を伝えてくれるのだ。

遺跡の当事者、または元々の所有者と呼べそうな人々は、当然ながらはるか昔に滅んでしまつていてこの世にはいない。だから、遺跡は現代における所有権に抵触しない範囲において、今を生きる我々が自由に取り扱つても構わない、そう考えることは確かに不可能ではないかも知れない。過去を生きた人々の多くは遺跡の発掘を望んでいなかっただろうが、発掘して欲しくないとも思つていなかっただろう。当たり前である。遺跡とはほとんどの場合、意図せざる結果として遺されたのだから。自分たちが住んでいた場所や使っていた道具が発掘の対象になるとは夢にも思わなかつたはずである。それならば、たまたま遺されたものを掘り起こし、我々の知の向上に活かし、人類の共同遺産として引き継ぎ管理して何が悪いのか。いや、悪いどころか、その発掘は我々後世の人間の使命とすら言えるのではないか。

以上のことからわかるように、考古学はその背後に「我々は人類の一員なのだ」という壮大な自己認識を隠し持ち、人類史を俯瞰するという途方もない視点から個々の遺跡に接することを要求している。自分たちは古代ギリシャ人ではなくてもパルテノン神殿を自由に調査してもいいし、縄文人ではなくても大森貝塚に遺された土器や骨を持ち帰つても良い。何故ならそこにあるのは究極的には人類全体のものであり、我々は過去の人類からの贈り物を蘇らせ、そして未来の人類へと確実に受け渡すとい

う、現代の人類代表としての崇高な使命を負っているからだ。だが、本当にそうなのだろうか。

遺跡になったのは確かに意図せざる結果かも知れないが、それを作つた人々は少なくとも発掘されるのを望んでいなかったと容易に想像できる例は、少し考えてみただけですぐに思い当たる。そう、墓だ。ピラミッドや古墳を代表とする墓は、将来見ず知らずの人間たちによつて掘り返され、内部を晒され、遺体や副葬品を持ち出されることを目的に作られてはいない。むしろ、絶対にそんなことはされたくないという想いのもとで作られたと考えた方が自然だろう。自分自身や親愛なる者たちの墓を、遠い未来になつて人類の共同遺産だとか何とか勝手な理屈をつけて暴かれることになると思つて、喜ぶ人間などいるだろうか。何百年、何千年の後のことなんてもうどうでもいいと、呆れとあきらめ混じりに思うことはあるかも知れないが。

遺跡としての墓には間違いなく史料の価値があり、その発掘調査が我々に与えてくれる知的恩恵は計り知れないものがある。墓の発掘なしに考古学研究の進展などあるはずもない。そして考古学の素晴らしい成果なしに人類史の解明もまた進むはずはない。しかし、たとえ我々が我々の過去を知るために発掘が不可欠としても、墓に埋葬されている者や墓を作つた者たちからすればそれは墓荒らしや盗掘と大差はない。本人やその代弁者が誰もいないから好き放題やつているだけだ。しかも金銭目的や怨恨のためならまだわかるが、人類の使命という美名のもとに堂々と、誇らしげに他人の墓を掘り返すのは、ある意味もつと野蛮で恥知らずな行為だと言われても仕方ないのではないだろうか。

と、ここまでかなり暴論めいたことを書いてしまつたが、別に考古学や考古学者を不当に貶めようというつもりはないのはご理解いただきたい。考古学は非常に魅力的で重要な学問であり、それに携わる考古学者たちの熱意と献身に対して、我々は感謝こそすれ非難などできるはずもない。ただ、考古学を研究する以上、墓を含めた過去の他者の遺物を発掘することは不可避なのであり、考古学を必要とする現代の我々はどこまでいっても一種の共犯者なのである。もし本当に「ファラオの呪い」などというものがあるのだとすれば、それは考古学者や発掘隊だけでなく我々全員に降りかかるべきだろう。

考古学が根源的に抱える、発掘が死者の冒瀆にあたるのではないかという不安は、門外漢がこんなところで偉そうに指摘するまでもなく、これまで多くの考古学者たちが強く意識してきた問題だつたようである。例を挙げると、「日本考古学の父」の異

名で知られる濱田耕作は、本邦初の考古学的方法論の概説書である主著『通論考古学』の中で、考古学者の出版義務について論じつつ次のように述べている。

考古学的遺跡の発掘は、それ自身は一個の破壊なり。これを記録の方法によりて永遠に保存し、出版によりて記録を学界に提供するにおいて、はじめて破壊の罪障を消滅せらる。

畢竟公的資料を破壊し、これを死蔵するものというべく、過去の人類に対して、その空間的存在として残されたる生命を絶つる罪悪を行うものというべし。もし発掘の報告を出版せざるくらいならば、これをなし得べき時期まで、遺物の最好保存者たる土砂中に放置して発掘せざるにしかず。ゆえに発掘の報告出版は、発掘事業の一部分にして、a 発掘ありて記録なく、記録ありてこれが刊行を怠るは、b 分離すべきにあらず、その費用と時間とは始めより見積もり置かざるべからず。これ実に考古学者の道徳的義務として、厳肅に服従せざるべからざるところなりとす。

元々は美術史の研究を志していた濱田らしく、彼が罪悪感を覚える対象はどちらかと言えば過去の人々というよりも文化財としての遺跡そのもののような印象を強く受ける。それに彼は墓の発掘だけを問題にしている訳ではない。とは言え、発掘はそれ自体では破壊に他ならないと断言する姿勢には、^c考古学調査がある種の後ろめたさを伴う活動なのだという自戒の念がにじんでいる。

(中島啓勝「権利とアーケオロジー」)

設問

(一) 空欄 a・bに入る語句として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

- 1 さておき
- 2 決して
- 3 あたかも
- 4 並びに
- 5 なんぞ
- 6 ゆえに

のうちから一つ選び、その番号を記せ。

- 1 考古学は、人類の崇高な使命を果たすためにピラミッドの調査をしたり遺体や副葬品を持ち出したりすることで、埋葬されている死者たちの呆れとあきらめを生む可能性を常に持っている。
- 2 考古学は、人類の使命という美名のもとピラミッドに代表される墓を勝手な理屈をつけて暴こうとするのにその記録を出版しようとしないので、死者から呪われる可能性を常に持っている。
- 3 考古学は、人類の使命という美名のもとピラミッドや古墳を含めた過去の他者の遺物を発掘することになるので、死者の冒瀆にあたるのではないかという不安を抱えている。
- 4 考古学は、人類の崇高な使命を果たすために墓を荒らしたり盗掘したりすることで研究を進展させ成果を生み出すので、墓に埋葬されている者や墓を作った者たちを不当に貶めてしまう不安を抱えている。
- 5 考古学は、人類の解明という使命を負って古墳などの墓を金銭目的であることや怨恨のためであることを意識しながら発掘するために、死者を冒瀆しているのではないかという罪悪感を覚えている。

(以上・五十点)

二 次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

2025年に大阪で2度目の万国博覧会が開催される。1970年に「人類の進歩と調和」をテーマに日本で初めて開かれて以来55年ぶりだ。今回のテーマは「いのち輝く未来社会のデザイン」だという。日本が誇る医療技術とITを駆使した未来社会を、具体的に示そうという意気込みが感じられる。だがこうした技術は日本に限るわけではない。せつかく日本でやるのだ。もう少し日本らしさを示せないだろうか。

そこで頭に浮かんだのがジャポニスムである。19世紀の後半、日本の芸術・工芸が西洋に熱狂的に受け入れられ、文化や思想に大きな影響を与えた現象だ。その波が再び来ようとしているのではないか。日本は明治維新以来150年にわたるグローバル化の荒波の中で先端的科学技術を鍛えてきた。そこに、日本がこだわり続けてきた情緒的な自然観と脱主体的な世界観を乗せると、限界を見せ始めた西洋由来の論理的・客観的な世界観に新風を吹き込めるのではないかと思うのである。

明治維新の前夜、既に日本の文化や芸術は西洋の大きな関心を引き付けていた。宮崎克己著『ジャポニスム』(講談社現代新書)によれば、1855年にパリで初の万博が開かれ、会場の外では日本の品々がもてはやされていたという。人気の的は団扇と扇子だった。そこに描かれた日本的な図柄、意匠、色彩に、西洋の人々はそれまで経験していなかった世界の解釈を見いだしたのだ。

15世紀以来、西洋の絵画は窓から見た風景を遠近法と明暗法によって描き、見る主体と見られる客体との関係がはっきりと意識されていた。一方、江戸時代の町人の自由な発想で描かれた扇の絵は主客の関係がいまいで、物と人との位置も大きなばらつきが見られた。神の視点から解放されたがっていた西洋の芸術家たちは、そこに多様な意味と自由な空間創造の可能性を見たのだ。

日本の団扇や扇子が西洋の女性に受け入れられ、家庭の装飾やファッションとして使われたのも、日本文化の受容が急速に広がった理由といわれる。政治思想と無関係な日本の芸術を、市民はたやすく生活に取り入れることができた。モネ、マネ、ドガ、ルノワール、ゴッホ、ゴーギャンなど、この時代に日本の浮世絵に大きな衝撃を覚えて、新たな作風を考案した作家は少なくな

い。絵画の中で人物よりも自然が主役となり、黒や赤などの色彩が大胆に用いられ、絵に登場する人物がさまざまに語りかけてくるようになった。

芸術だけではない。それまで神から主体性を与えられ「真理」を見つめていた西洋の人々が、個人の哲学を構築し始めた。「神は死んだ」と言ったニーチェからハイデガーやサルトルに至る実存主義が登場する。文学の世界でもドストエフスキー、カフカ、モーパッサンなど、神から離れて新しい個人の生き方を探る作品が生まれた。建築でも機能美を強調したル・コルビュジエや、水平線を重視したフランク・ロイド・ライトなど、新しい生き方を追求する作品が出てくる。ジャポニスムはそういった変革に直接関与したというよりは、触媒としての役割を果たしたのではないかと宮崎は言う。

ただ、ジャポニスムが市民生活の中に急速に浸透し、あらゆる方面に対して影響力を発揮したことは重要だ。それは現在の状況と似ている。戦前から日本の市民の手で育てられた漫画やアニメが、今フランスやドイツで熱狂的な人気を得ている。和食レストランは海外で店舗を増やし、日本酒も各国で売り上げを伸ばす。日本へ来る観光客は、木造家屋や庭園に大きな興味を示す。和服を着て伝統的な行事に参加する外国人も増えている。

日本人の暮らしが、私たちが意識しているよりもずっと伝統的な意匠や意識で形作られているからだ。どの街にも神社仏閣があり靈性に富む自然が息づく。盆正月にお参りし、古式ゆかしい衣食住の作法を季節の節目に共有する。万物に神性が宿り、どんなものにも心があると見なす日本的な感性が、人形やロボットとの共生を支える。天から主体性を与えられた人間が自然を支配し管理しようとする論理ではない。主体も客体もなく万物と溶け合おうとする日本の精神文化が息づいている。

それが急速な進歩を遂げているITや人工知能と組み合わせたらどんな新しい世界が現出するだろうか。フィジカル空間とバーチャル空間が融合していくのが未来だとすれば、人間が他の媒体に心や体を移して活動することになる。アニメの主人公になり、ロボットに変身してフィジカルな世界を体験する。それはまさしく日本の文化が古くから描いてきた世界なのだ。

そう思うと、なぜ村上春樹の小説が世界で人気を博すのかが分かるような気がする。人と動物の間で、現在と過去の間で、あの世とこの世との間で、異次元の世界の間で、人々が往還する。西洋の人々は、二元的な空間と線的な時間という論理で世界を

見つめてきた。村上人気は、彼らが主客を脱し、多元的に量子的に世界を見ようとしている空気の表れではなかるうか。だとすれば第二のジャポニスムはもう目の前にある。

(山極寿一「ジャポニスムと先端技術」)

設問

(一) 本文の内容に合致するものを、次のうちから二つ選び、その番号を記せ。

- 1 日本的な図柄や意匠、色彩が施された団扇や扇子は、西洋の人々によって家庭の装飾やファッションとして使われた。
- 2 遠近法と明暗法によって描かれた西洋の絵画には、多様な意味と自由な空間創造の可能性が認められる。
- 3 日本の浮世絵に影響を受け、黒や赤などの色彩が大胆に用いられて描かれたモネやマネらの絵画は、自然が主役となって語りかけてくるようなものだった。

4 神から主体性が与えられたことによって個人の哲学を構築し始めた西洋では、サルトルらの実存主義や、個人の生き方を探るドストエフスキーらの文学作品が生まれた。

5 日本人によって育てられた漫画やアニメの影響で、海外における和食レストランや日本酒の売り上げが伸び、日本の伝統文化に関心を持つ外国人が増えた。

6 世界的に人気のある村上春樹の小説は、人と動物の間や現在と過去の間、あの世とこの世との間、異次元の世界の間で人々が往還する点に特徴がある。

(二) 傍線——について、筆者は「第二のジャポニスム」をどのようなものととらえているか、日本文化のあり方をふまえて説明せよ(句読点とも四十字以内)。

(以上・四十点)

三 次の文章は、明德二年（一三九一）に、將軍足利義満に対して山名播磨守満幸らが起こした反乱を描いた軍記物語の一節である。これを読んで、後の設問に答えよ。

さてもうたてかりしは、先年御所様に召し使はれける武田下条といふ者あり。

一旦昵近じつじん申しける間、上様の御覚えよかりければ、賞の甚だしきにおごつて、心中の不義もありけるにや、御所様御覧じ限らせ給ひて御追放ありければ、連々に嘆き申しけれども、つひに御免もなくして隠居したりけるが、今度の合戦をよき便りあありと心得て、御免もなきに便宜の勢に馳せ加はりて、内野の合戦を見物し居たるところに、出雲の国の住人塩冶信濃守といひしはこの下条がために年来の小舅こせうとなり。播州の手にあつて、この様をみるに、始終はかばかしからじと思ひければ、十二月二十七日の堂より姉婿の下条がもとへ、内々降参の志あるよしを申し送たりけるに、「今はこと急になりて内々申し沙汰のこともかなふまじ。ただいくさの日思ひの外に行き合ひたるほどにて申し沙汰すべし」と返事したりければ、互ひに内野口にて心にかけて尋ねけるほどに、合戦にうち負けて播州引き給ひける時分、氣勢にかまぎれてまはりけるが、乗りたる馬、急所を切られてはたらかざりけるほどに、いかがすべきと思ひけるところに、下条にきと見合ひけり。

塩冶申しけるは、「申し談じつる道も今はいらぬところなり。これにて腹を切るべし。この間の情けには雑人に引き散らさずして、恥を隠してたびでんや」と申しければ、下条「さることや侍るべき。御分一人のことは勲功にも申しかへて助け申すべし。我が馬の後に乗れ」と申しければ、塩冶異議にも及ばずして、下条が馬の三頭づに乗り直らんとするところに、目めにあまるほどの大男、鎧着ながら二人まで疲れたる馬に乗りたりければ、なじかは馬もこらふべき。

なづきを捨てて跳ねければ、二人ながら跳ね落とされて、すでに御方に討たれんとしけるところに、下条心とく起き直りて、とかく言ひ逃れて、塩冶が鎧を脱がせて、二人馬に乗り、御所の御陣へ走り参りて申しけるは、「御勘気の下条こそ山名播磨守の兵塩冶信濃守と申す者を組み生け捕つて参りて候へ。この忠賞にはこの間の御不審を御免かうむりて、いよいよ忠節をいたすべき」よしを申しければ、いまだ御免もなきに参じて直に忠だてを申す条、奇怪なる者かなと思し召さるれども、戦場なれば力なしと思し召し許されて、召人めしうどをば、当職なれば赤松上総介のかたへ渡すべきよし管領より仰せ出だされしかば、さしも頼み

て出でたりける小舅を召人になして縄をかけ、侍所へ渡しければ、塩冶これを聞きて申しけるは、「播磨守の芳恩も忘るべきに
てはなけれども、上へ向け申されて、逆罪の弓を引き給へば、始終は亡び給ふべしと思ひ定めて、この間内々下条に申し談じ降
参のよしにて参りたれば、戦場において組み伏せて生け捕るよし申しつるこそ返す返すも無念なれ」と諸人の前にて申しければ、
「さては下条うたてしきことをしたりけり。弓矢取る身は相互ひに降参すれば、助くるも助けらるもならひなり。まして所縁
の中ならばあまりにざんなし」と諸人の沙汰になりしかば、はたして上の御耳に入り、いよいよ御勦氣深くなりて、立ち寄る方
もなかりしかば、正月二日の暮れほどに、もとどり切つて入道し、禅僧の衣の姿になり、泣く泣く都を迷ひ出でて、行方知らず
なりしこそうたてかりしことどもなれ。

〔明德記〕

注 御所様・上様・上 いずれも足利義満のことをいう。

昵近 貴人のそば近く仕えること。

内野 平安京大内裏が荒れ果てた後にできた野原。

播州の手にあつて 山名播磨守の軍勢に加わつて。

三頭 背中やや高くなつた部分。

なづきを捨てて 頭を激しく振つて。

召人 囚人。

当職 担当者。

管領 將軍の補佐役。

ざんなし むごい。

設問

(一) 傍線 a・b の意味として適當なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

a					b				
便り					ならび				
5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
機会	配慮	音信	縁故	依頼	人の噂	時の運	仏の導き	世の常	師の教え

(二) 傍線~~~~~ア・イの解釈として適當なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

ア ただいくさの日思ひの外に行き合ひたるほどにて申し沙汰すべし

- 1 ともかく合戦の日に運よく出会えた時には弁明するとよいでしょう
 - 2 ともかく合戦の日が意外なほど早くきてしまったので弁明しなさい
 - 3 ともかく合戦の日に偶然出会ったことにして取り計らいます
 - 4 ともかく合戦の日は予想できないが取り計らうことはできません
 - 5 ともかく合戦の日に秘かに落ち合ったうえで取り計らってください
- イ 目にあまるほどの大男、鎧着ながら二人まで疲れたる馬に乗りたりければ、なじかは馬もこらふべき
- 1 驚くほど大きな男が鎧を着て二人も疲労した馬に乗ったのだから、馬がもちこたえられるはずはない
 - 2 驚くほど大きな男が鎧を着た二人の男と疲労した馬に乗ったところ、なんとか馬はもちこたえようとしていた
 - 3 驚くほど大きな男が鎧を着た二人の男と疲労した馬に乗ったら、すぐに馬はもちこたえられなくなるのではない
 - 4 驚くほど大きな男が二人、重い鎧のために疲労した馬に乗ったら、馬が暴れ出さないわけではない
 - 5 驚くほど大きな男が二人、鎧を着て戦うのに疲れたので馬へ乗ろうとしたが、なぜか馬がいうことを聞かなかった

(三) 傍線……「これにて腹を切るべし。この間の情けには雑人に引き散らさせずして、恥を隠してたびてんや」の説明として適當なものを、次のうちから一つ選び、その番号を記せ。

- 1 塩冶が下条に殺してほしいと頼み、自分の鎧や太刀は形見として持って帰ってくれるように言った。
- 2 塩冶が下条に対して自害を迫り、死んだ後もあなたの名譽は守ると約束した。
- 3 塩冶は、これからすぐ義満を亡き者にすると宣言し、自分自身で恨みを晴らすと息巻いた。
- 4 塩冶が自害を決心し、下条に自分の死後が見苦しくないように対処してほしいと頼んだ。
- 5 塩冶は、これからすぐ山名を成敗しに行くと言出し、自らの手で逆賊の汚名をそぐことを誓った。

(四) 傍線……「申されて」の「れ」と文法的意味・用法が同じものを、次のうちから一つ選び、その番号を記せ。

- 1 修理大夫経盛の子息に大夫敦盛とて、生年十七にぞなられける
- 2 ものは少し覺ゆれど、腰なむ動かれぬ
- 3 いと思ひの外なる人の言へれば、人々あやしがる
- 4 さぎさぎ召されける所へは入れられず、遙かに下がりたる所に、座敷しつらうておかれたり
- 5 千本の釈迦念仏は、文永のころ、如輪上人、これを始められけり

(五) 本文の内容に合致するものを、次のうちから二つ選び、その番号を記せ。

- 1 塩冶は、足利方の軍勢が内野口へ進むことを下条に教えた。
- 2 下条と塩冶は、足利方の者にもう少しで殺されそうになった。
- 3 義満は、下条の身柄を赤松上総介に預けた。
- 4 侍所で、下条と塩冶は言い争った。
- 5 下条は、武士をやめ都をあとにした。
- 6 筆者は、下条の振る舞いを好意的にとらえている。

(六) 傍線——「御勘気深くなりて」について、義満はどのようなことに対し「勘気」を深くしたのか、説明せよ(句読点とも三十字以内)。

(以上・六十点)